



Creative Application A23

存在とメディア実装2

「リアリティ」 存在感を醸す

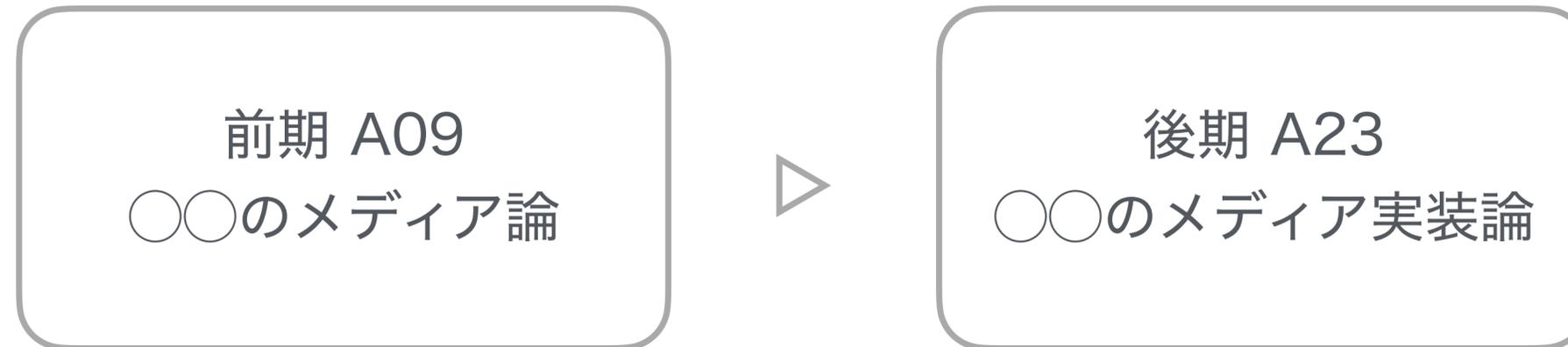
2023年度

渡邊 賢悟 (渡辺電気株式会社)

# 受講のてびき

---

- ・ 本資料は作成者の解釈が含まれます, 答えのない議論があります
- ・ 前半で1テーマの紹介, 後半でテーマを深める議論を行います
- ・ 前期と後期がリンクしています. 予習復習の参考にしてください



# 本日のテーマ

---

- ▶ **表現の追求の先, リアリティと向き合う**

# 前期概要

---

- ▶ 存在(existence)と実在(real)の議論
- ▶ 地域や文化による主客の捉えかたの違い, 存在の捉えかたの違い
- ▶ 表現者が求めた知覚の先の”本物” → リアリティとはなにか
- ▶ Virtualの時代, リアリティの見直し

# リアリティ・知覚・主客・存在

- ▶ 存在の捉え方によって変わるリアリティ
  - ▶ 認識をリアルとするのか, 実在をリアルとするのか, 理想を…など



**どのケーキがリアル?**

# 存在感とメッセージ性

---

- ▶ メッセージは、存在を印象づけることで伝わり方が変わる
- ▶ 多くの表現者も出力の存在感について工夫し、表現している

カレーは美味しい

タミル語のカリ（kari、スープの具の意味）またはカ ril（karil、スパイスで味付けされた野菜や肉の炒め物）が語源とされる。複数の粉末香辛料を混合させて作ったソースを用いた料理全般を指す。

もともとインド人は「カレー」という言葉を使わずそれぞれのカレー料理には個別の名

**カレーは美味しい**

タミル語のカリ（kari、スープの具の意味）またはカ ril（karil、スパイスで味付けされた野菜や肉の炒め物）が語源とされる。**複数の粉末香辛料を混合させて作ったソースを用いた料理全般**を指す。

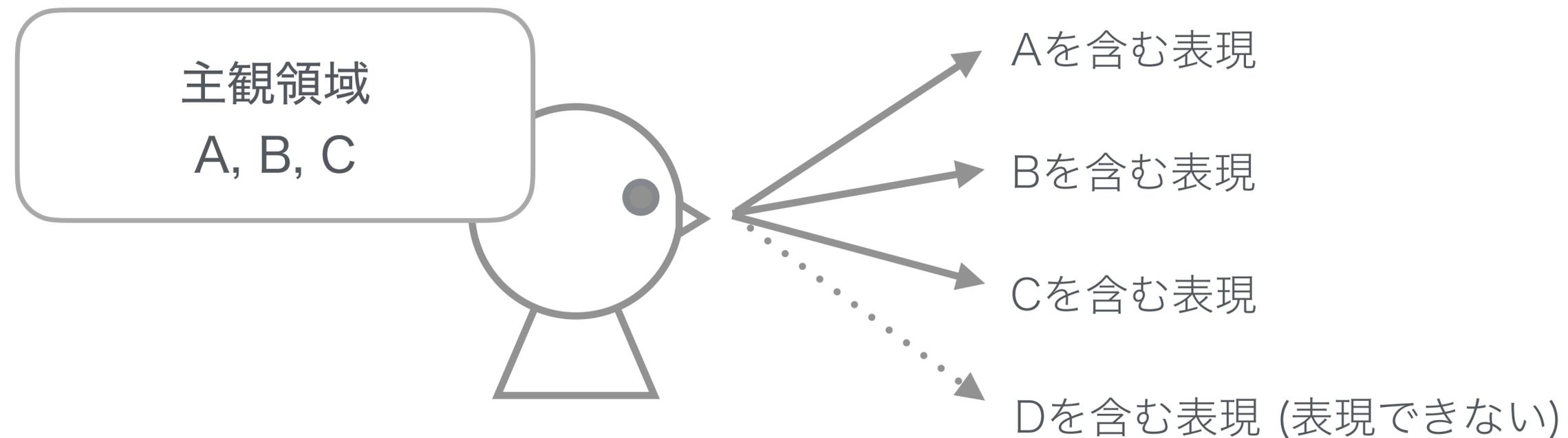
もともとインド人は「カレー」という言葉

引用: Wikipedia日本語版「カレー」 2023.02.06 13:56版 <https://ja.wikipedia.org/wiki/カレー>

# 表現はリアリティを帯びる

---

- ▶ そもそもメッセージは発信者の主観が源泉であり, リアリティである
- ▶ つまり表現の追求とは, 自然と自分のリアリティと向き合うこととなる



# まとめ

---

- ▶ リアリティ
  - ▶ 存在の解釈は多様でどう捉えるかは各人で異なる
  - ▶ メッセージは各自の主観からの出力で, リアリティを含む
  - ▶ リアリティへの自覚を深めると, メッセージを明瞭に表現できる
- ▶ 各自にとっての存在感とは何かを見つめると発見があるかもしれない

# 本日の議論・考察一助

---

- a. 各参加者のRealとVirtualの解釈を聞いてみたい
- b. 存在感の醸成で今から工夫できることはあるだろうか
- c. **具体的なリアリティと表現についての議論**

# 次回予定

---

文化とメディア実装1

「マルチメジャー」折衷と合一

# 参考文献

---

1. 藤田一照, 「アップデートする仏教」, 幻冬舎, 2013
2. 藤田一照, 永井均, 山下良道, 「仏教3.0を哲学する」, 春秋社, 2016
3. 飲茶, 「史上最強の哲学入門」, 河出文庫, 2015
4. 飲茶, 「史上最強の哲学入門 東洋の哲人たち」, 河出文庫, 2016
5. 森田真生, 「数学する身体」, 新潮社, 2018
6. 西田幾多郎, 「善の研究」, 青空文庫, 1979
7. 藤田正勝, 「日本哲学史」, 昭和堂, 2018井筒 俊彦, 「イスラーム文化 - その根底にあるもの」, 岩波書店, 1991
8. 竹田青嗣, 「現象学入門」, NHK出版, 1989
9. 岡本 裕一郎, 「いま世界の哲学者が考えていること」, ダイヤモンド社, 2016
10. 西垣 通, 「AI原論 神の支配と人間の自由」, 講談社選書メチエ, 2018
11. マルクス・ガブリエル著, 清水 一浩訳, 「なぜ世界は存在しないのか」, 講談社選書メチエ, 2018
12. アレックス・オスターワルダー他著, 小山龍介訳, 「ビジネスモデル・ジェネレーション ビジネスモデル設計書」, 翔泳社, 2012
13. ティム・クラーク他著, 神田昌典訳, 「ビジネスモデルYOU」, 翔泳社, 2012
14. ティム・クラーク、ブルース・ヘイゼン他著, 今津美樹訳, 「ビジネスモデル for Teams」, 翔泳社, 2012
15. 沼上幹, 「組織デザイン」, 日本経済新聞出版, 2004